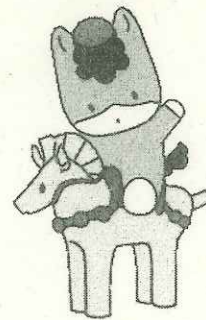


東国文化自由研究レポート



研究テーマ

敬馬き! 古代群馬は先進国だった!?

～激動の時代を古墳から読み解く

提出日 2021年8月27日(金)



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 1組 12番

氏名

岸 悠人

1. 研究の動機

学校の社会科（歴史）の授業で弥生時代に続き古墳時代があり、やがて飛鳥時代、奈良時代にかけて今の日本という国が形作られてきたことを学習した。

私はそんな遠い昔の時代に興味を覚えて、色々と調べてきた。出来事を中心となった今の近畿地方やヤマト王権、大和朝廷については教科書や様々な書籍、歴史漫画などで詳しく説明されていた。

しかしその時、私は「最も脚光を浴びるこの地域以外でも、当然古代の人々による歴史が作られてきたはずだ。」と思った。さらに「その頃、私たちの暮らす群馬はどうなっていたのだろうか？」と疑問を持った。

この疑問を解き明かすべく調査をすることとした。

2. 調査の方法・内容

「東国文化」という言葉をキーワードに文献を調査し、そこを手がかりに、できる限り現地調査もすすめていくことで群馬における当時の歴史の流れをまとめていく。

- ・文献調査…東国文化、古代群馬に関する情報を収集する。

インターネット

書籍

- ・現地調査…文献で得られた情報から当時を知るには古墳の調査が欠かせないことがわかった。

実際に現地に行き、この目で確かめ体感したい

かみつけの博物館

お富士山古墳

太田天神山古墳

宝塔山古墳

総社二子古墳

大室古墳群

遠見山古墳

保渡田古墳群

まだ記録が充分に残されていない古代の歴史を解き明かすには、当時の遺跡や遺物が重要な手がかりであり、東国文化を調査するためには古墳を中心とした調査が必要であることがわかった。

私は古墳についての文献を調べていく中で築造年代、地域別にまとめた表を見つけた。

これを調査の出発点とする。

3. 調査の結果・考察

3. 1 古墳遷移図を見渡す

図1は群馬県内の古墳遷移図である。

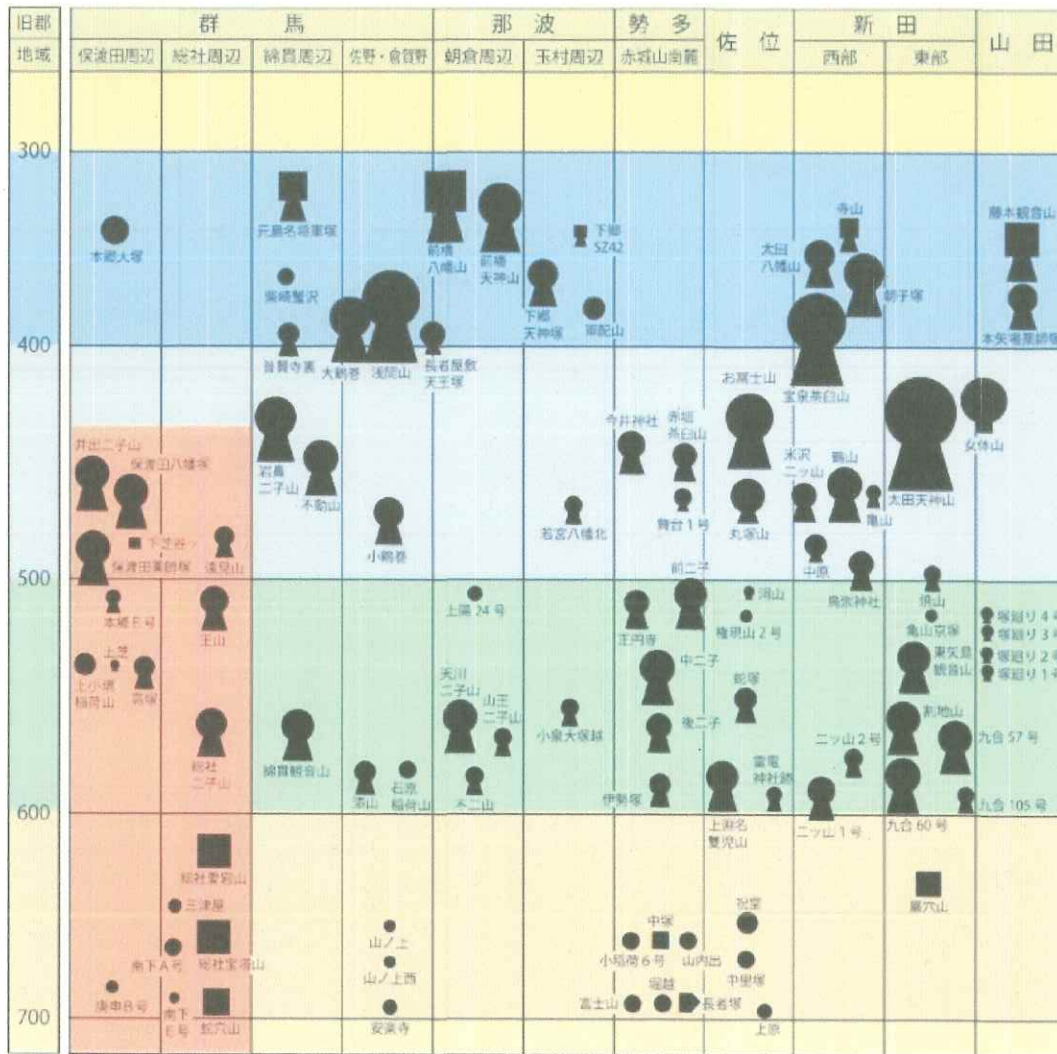


図1 群馬県内の古墳遷移図

ここからまず次のことを見取ることができた。

- ① 古墳は4世紀から7世紀にかけて築造された
- ② 古墳は群馬県内の全体にわたって築造された
- ③ 古墳には大小様々な大きさがある

①に関しては、古墳時代を4～7世紀ごろとすることができる。250年頃の卑弥呼の死を弥生時代の終

わりとし、710年の平城京への遷都を奈良時代の始まりとすると、その間が古墳時代となることがわかった。

また②については、群馬県全域に分布しているので古代にもかかわらず、人々が自分の足で長い距離を移動して、文化の流れや広がりを作ったのだと思った。

③の古墳の大きさについては埋葬された人物の権力の大きさを示しているといわれている。しかし、当時の情勢などにより、そう単純には言えない部分もある事が分かった。

3. 2 古墳の形状分布

また、この図1をさらに細かく見ていくと古墳の形状分布は各年代によって特徴が有ることに気付いた。分布をグラフ化すると以下のようなになった。

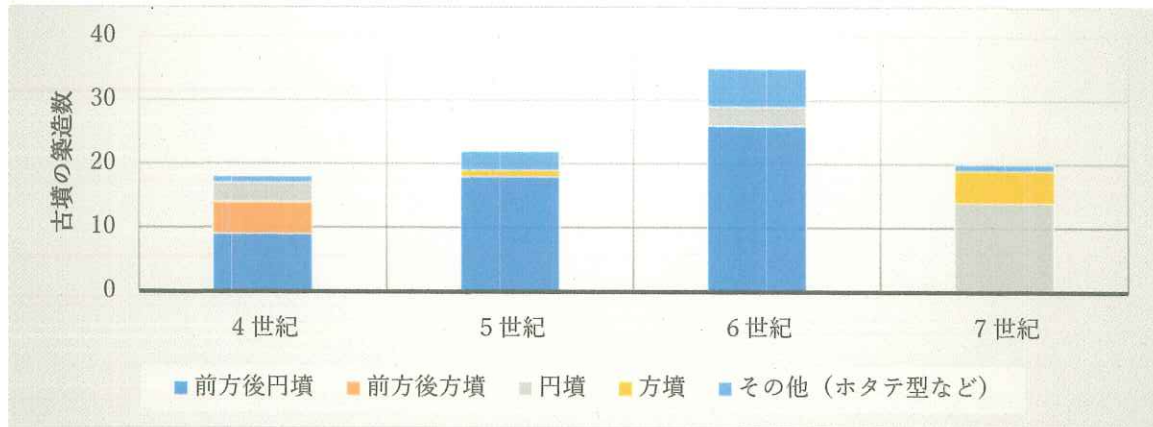


図 2 古墳の形状分布 (年代別)

このグラフから以下のことがわかった。

- ① 4世紀前半にのみ前方後方墳が築造されている
- ② 全体を通じて、前方後円墳が最も多く作られているが、7世紀になると突然築造されなくなった
- ③ かわって7世紀になると大きな古墳は方墳が主流となっている

古墳の形状の主流が切り替わる時には、突然でしかも群馬県全域にわたって一斉に変化が訪れている。たとえば、この集落ではこの古墳を作り続けている、とか先代の古墳がこうだから自分はこうしようなどと適当に形状が決まっていたわけではなさそうだ。

私は上記の謎を解くためには年代を追って調査する必要があると考えた。

3. 3 各年代別で見る群馬

3. 3. 1 ~4世紀前半

3世紀終わりから4世紀初めにかけて、群馬固有の弥生土器が急速になくなり、東海西部の様式の土器が出土されるようになる。東海地方（現在の名古屋周辺の濃尾平野一帯）からの移住者が群馬にやって来て開拓を始めたと思われる。その移動経路は太平洋から東京湾に入り、昔の利根川等を遡上してたどり着いた（元総社明神遺跡から舟形木製品が出土されている）。

彼らが前方後方墳を残したと言われている（元島名将軍塚（高崎）、前橋八幡山古墳、藤本観音山古墳（太田））。濃尾平野には数多くの前方後方墳がある。例えば、岐阜県の笹山古墳は群馬の古墳よりも古い3世紀初めの頃の前方後方墳とのことだ。

そこで私は、当時、車も無い時代に人々がどれだけの距離を移動してきたのかを考えた。水路を使って移動したとも言われているが、仮に陸路で計算すると約500km近くあるようだ。徒歩だと100時間以上かかる計算になる。もし実際に徒歩で移動することを考えると気が遠くなった。船だともっと早く楽に移動できたのだろうか。いずれにしても未開の地へ道なき道を通して途方もない日数、年月をかけてたどり着いたのだろうと想像した。

3. 3. 2 4世紀なかごろ

4世紀中頃から古墳の形状が前方後円墳に突然変わってくる（前橋天神山古墳など）。前方後円墳はヤマト王権の特徴であると言われており、ヤマト王権が西から勢力を拡大してきたことがわかる。つまり、先住の東海系移住者達を征服していったのだろうか。私はヤマト王権が彼らを従えたとしても、徹底的に滅ぼすようなことをしたわけでは無く、協力的な同盟のような関係で従えたのではないだろうかと考えた。その理由は、例えば前橋天神山古墳などは全体から見ても比較的大きな古墳であり、徹底的にヤマト王権に反抗していた場合、あのような墓を作ることを認めて貰えないのではないかと考えたからだ。

3. 3. 3 4世紀末～5世紀初め

東日本でも有数の巨大な前方後円墳が作られた（浅間山古墳、宝仙茶臼山古墳）。これまで以上に有力な王（ヤマト王権に従属する地方の王。もしくは豪族）が登場してきたと思われる。私はこれほどの大きな古墳を作れたのだから、技術はヤマト王権からの協力、労働力は地元住民をたくさん動員したのだろうと考えた。労働力がある（＝人口が多い）ということは食料も豊富にあり（大規模な農地が広がっていて食物に困らない）、すでに交易も盛んだっただろうか。

3. 3. 4 5世紀なかごろ

その後、東日本最大の古墳や、長持形石棺を備えた古墳が作られた（太田天神山古墳、お富士山古墳）。ヤマト王権の大王クラスと比べても遜色ない規模や形式だった。



写真 1 お富士山古墳 と 長持形石棺



写真 2 太田天神山古墳

長持形石棺は当時、ヤマト王権の大王クラスが埋葬されるような格の高い石棺で、地方からはめったに発掘されていない。また、太田天神山古墳は東日本最大の古墳であり、ヤマト王権の承認のもと築造されたのであれば、非常に重用されていたことになる。

しかし、こうした古墳はこれ以降出てこない。私は、ヤマト王権に特別に重宝されるような働きがあり、その見返りだったのではないかと考えた。ヤマト王権が群馬を平定していく上で非常に協力的だったのだろうか。太田天神山の王はヤマト王権に対して従属と言うよりもむしろ同盟に近い存在だったのだろうか。そして文献を調べていくと、このころヤマト王権はすでに朝鮮半島や中国と外交を行っており、特に朝鮮半島へは兵を送り込んだりもしていたようだ。日本書紀などの伝承によると、この地方（上毛野）からも兵が送られており中心的な役割を担っていたとあった。軍事活動で功績があったならばこのような褒美も説明できるのではないかと考えた。

また、群馬ではこの頃、馬が朝鮮半島からヤマト王権を経て伝わってきたとされている。群馬は馬の飼育や生産の技術を持った渡来系の技術者集団が存在し（朝鮮半島への出兵などとも関係しているのだろうか）、馬の飼育に適した土地が広がっていたことなどから馬の一大飼育牧場として重要視されていたのかもしれない。

3. 3. 5 5世紀末

群馬全域にわたって中規模以下の前方後円墳が作られていった。古墳の規模が小さくなったのはヤマト王権による地方支配が進み、有力な地方の王（たとえば、先の太田天神山古墳に埋葬された王）達を持ち上げる必要が弱まったためではないかと考えた。中国との外交や朝鮮との争いなどを展開できるほどなので、この頃のヤマト王権は東国までの倭国をしっかりと支配できていたと思ったからである。

また群馬全域にわたり古墳が点在しているのはヤマト王権が支配を強めるため、各地方の王の勢力に偏りを持たせないようにしたからではないかと考えた。

この頃、保渡田の古墳群（二子山古墳、八幡塚古墳、薬師寺古墳）が築造され、これらの埋葬者が治めていたと思われる三ツ寺I遺跡の王たちは、伝承では崇神天皇、豊城入彦命を祖先に持つ車持氏ではないかとされている。私は、そうすると、この王たちはもはやヤマト王権の皇族であり、地方の従来王ではなく中央から上毛野の支配者が送られてきているということではないだろうか考えた。

なお、保渡田周辺については、6世紀初めの榛名山の噴火により、灰に埋もれてしまい、この地方から大型の前方後円墳は作られなくなった。



写真 3 保渡田古墳群

3. 3. 6 6世紀

引き続き、各地で前方後円墳が作られた（大室古墳群）。

古墳の規模が小型化していく中で、七輿山古墳はこの頃、最大級の古墳として作られた。伝承では、「武蔵国造の乱」が起こり、武蔵国の出来事ではあったが上毛野国小熊も介入したとある。この乱では、結果的に負け方についてヤマト王権に対立することになってしまった。その後、上毛野の緑野にヤマト直轄地（屯倉）が置かれることになる。また一段とヤマト王権の支配が進んでしまったと感じた。

七輿山古墳はそうした場所に作られた古墳であり、屯倉を治めるためにヤマト王権から来た人を埋葬したのではないだろうか。



写真 4 大室古墳群

3. 3. 7 7世紀

前方後円墳が作られなくなり、総社周辺に大型方墳が作られる程度となった。この頃ヤマト王権（飛鳥時代）では仏教の波及に伴い、権力者の権勢を表すのに墳墓ではなく寺院建立が重要視されるようになったためではないだろうか。

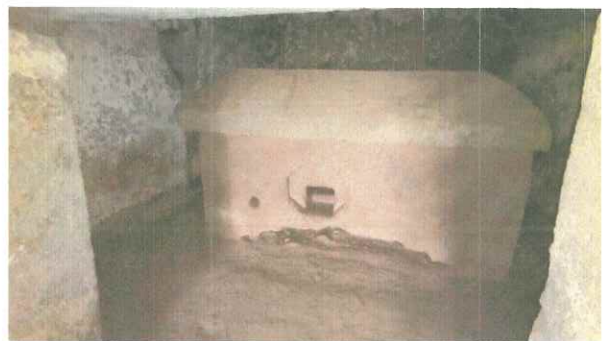


写真 5 宝塔山古墳 石室

宝塔山の家形石棺を見ると脚部に仏教美術の格狭間が彫り込まれており、この地方にも仏教が影響を与えていることが分かる。

また、もう一つの理由として蝦夷平定に向けた大和朝廷の思惑もあるかもしれない。例えば 637 年に上毛野形名が蝦夷征討に成功したと伝承があるが、7 世紀以降、蝦夷の支配を強めていきやがて平定してしまうと、それまでその前線拠点だった上毛野地方の軍事的な重要度、貢献度が薄れてしまう。こうしたことから古墳の築造も無くなっていったのではないだろうか。

3. 4 まとめ

これまで、年代別に古墳を調査し、伝承などと併せてその地域の出来事を調べてきたが、やはりヤマト王権との密接な関わりがあったことがわかった。ヤマト王権の支配が及ぶことで前方後円墳が築造されるようになり、逆にヤマト王権から見た地域の重要性が薄れたことや、仏教の波及などによって古墳が少なくなっていったのではないかと予想できた。

それでも古墳時代中盤には、軍事的な価値や馬の生産地としての価値などからヤマト王権に非常に重要視され、地方としては近隣よりも繁栄していたということが分かった。

教科書などではあまり触れられなかったとしても、古代群馬にも当然歴史があり、むしろ東日本をリードする先進地域だったと言うことがわかった。

4. 感想と今後の課題

最初に思った、古墳時代に私たちの暮らす群馬はどうなっていたのだろうか？という疑問について、いろいろと調査することで理解を深めることができた。ヤマト王権と協力し、東日本をリードしている時代もあったのだということがわかると、誇らしい気分にもなった。

しかし、今回調査したことはまだまだ表面的なことであり、資料が充分に残っていない古代の歴史を少しでも正しく理解するためには、もっとたくさんの古墳や遺跡を巡り、様々な人（学者の先生）達のお話を伺う必要があると思った。今後の課題として、今回訪れていない場所や資料館にも行ってみたいと思った。

今回、調査をしていて残念だったことがある。東日本最大と言われる太田天神山古墳だがせっかく行ってみたのだが案内板もあまり見当たらず、古墳に立ち入ることもできなさそうだった。とても重要な価値のある古墳なのでもっと整備や発掘作業をすすめて欲しいと思った。

また、古墳時代よりさらに前の東海地方から移住者がやってくる前の群馬先住民族がどのような人達で、群馬県人のルーツはどこまでたどれるのだろうかと言うことに興味を持った。さらに文献や資料が少なくなっていくと思うが、今後調査してみたいと思った。

参考文献

東国文化副読本 (群馬県、松島 榮治、2021年4月)

東国における古墳時代地域経営の初段階 (国立歴史民俗博物館研究報告 第211集 2018年3月)

豊城入彦命系譜と上毛野地域 前沢和之

赤城山南麓の古墳 2028.2.29 前橋市教育委員会事務局文化財保護課

榛名山東南麓の古墳 2029.11.6 前橋市教育委員会事務局文化財保護課

東国の古墳と大和政権 大塚初重 古川弘文館 2002年8月1日

全国遺跡報告総覧 <https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>

東国千年の都 (平成25年度 前橋・高崎連携事業文化財展)

<http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2015121800086/files/h25renkeiten1.pdf>